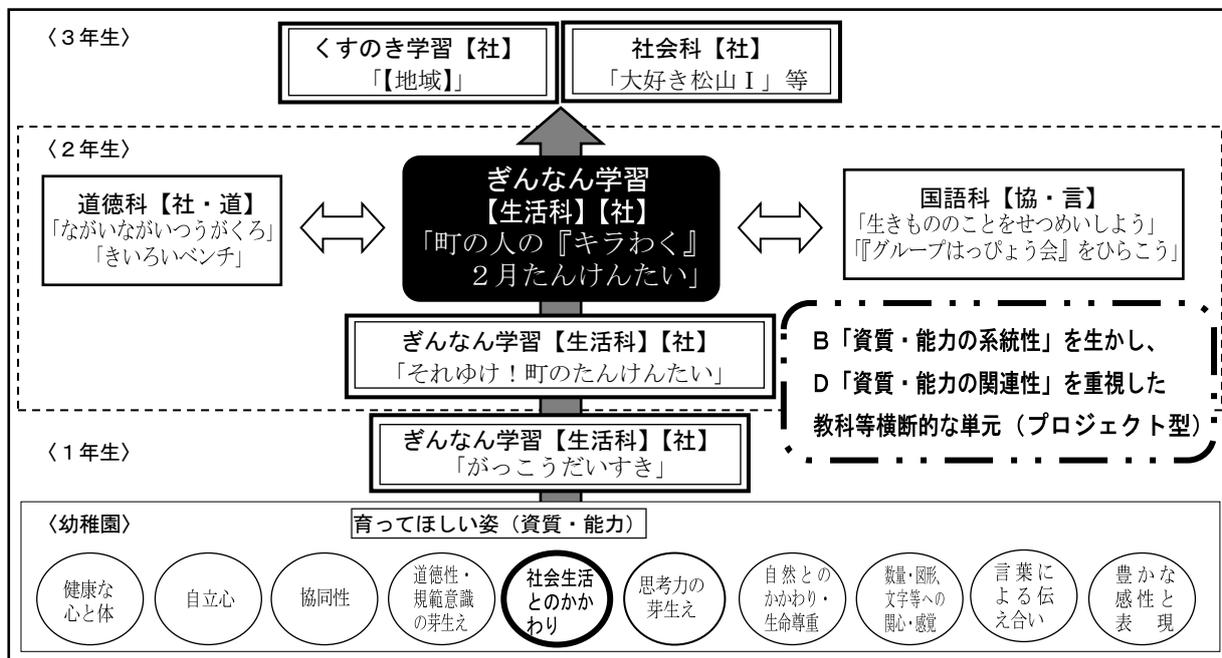


### 3 実践事例

#### 第2学年

#### 町の人「キラわく」2月たんけんたい ぎんなん学習【生活科】(+国語科・道徳科)

【単元全体構想について】(資質・能力の系統性と関連性を重視：プロジェクト型)



本単元は、縦軸をB「資質・能力の系統性」、横軸をD「資質・能力の関連性」として構想した。縦軸については、本単元において育てたい資質・能力の出発点を、「育てほしい姿」の【社会生活とのかかわり(社)】であることを踏まえ、幼児期の育ちが本単元で発揮されるように意識した。同時に、本単元は、3年生の社会科やくすのき学習へとつながる結節点であると捉えた。そのため、自分の生活が様々な人や場所とかかかわっていることを実感し、地域への愛着を感じることができるようになることで系統的に資質・能力を高めていくようにした。

横軸については、国語科や道徳科で高まっている資質・能力が発揮されるような教科等横断的な単元を考えた。例えば、国語科では、グループで話し合って考えを一つにまとめるよさが分かり、町探検のグループ活動で生かしたり、道徳科では、身近な郷土のよさを考え、自分の町のよさについて振り返ったりするなどである。

本学級の子どもは、幼児期から自宅や身近な公園、幼稚園などの主な生活の場を中心に様々な場所に出掛けたり、身近な人とかかわったりする経験がある。1年生では、小学校という初めての環境においても、学校探検を楽しみながら、様々な施設や先生などたくさんの人とかかわり、身の回りの生活を広げてきた。2年生の一学期では、附属小学校を中心とした地域を「ふぞくの町」とし、町探検を行った。子どもは、わくわくしたり驚いたりして心が動くようなすごいことを「キラわく」と捉え、ふだん何気なく通り過ぎる施設や公園にも関心を持ちながら、たくさん「キラわく」を見つけてきた。その多くが、探検先の様子や、「大きな冷凍庫があった」などの「もの」への気付きであった。町探検を通して、自宅と学校を往復する「点」であった場所が、「ふぞくの町」という「面」へと認識が変わり、「ふぞくの町」が親しみのあるものになってきている。さらに、町の人「キラわく」は少ないものの、ガイドの「〇〇さん」のように名前を憶えている子どもが多い。町探検によって、町の人とのつながりが子どもたちの心に確かに芽生えており、それが町の人への関心を高めることに結び付いている。

そこで、子どもたちの町の人への関心を更に高め、「ふぞくの町」への愛着を持つことができるようにしたいと願い、本単元を提案した。

【単元（ぎんなん学習）のねらい】

- 自分たちの生活は、地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわりを持っていること、自分の成長に気付くとともに、人々と適切に接したり安全に生活したりする。
- 地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所について自分とのかかわりで考え、振り返り表現する。
- 地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所に関心を持ち、親しみや愛着を持つ。

【単元の展開】（全28時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出会い	<p>町の人の「キラわく」を見つけよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 町探検のテーマを考える。</li> <li>○ 町探検の計画を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 1学期の町探検を振り返り、人や様々な場所について関心を持っている。</li> </ul>	4
追究	<p>町たんけんのじゅんびをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 探検先に予約を行う。</li> <li>○ 町探検の準備をする。</li> <li>○ 町探検に行く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相手先に適切にかかわるための予約をする言い方を考えている。</li> <li>● 交通安全や探検先でのマナーに気を付けて行動している。</li> </ul>	11
	<p>町たんけんをふりかえろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「キラわく」を伝え合う。</li> <li>○ 「ふぞくの町」について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ふぞくの町」のよさについて気付いている。</li> </ul>	3
振り返り	<p>「ふぞくの町」の「キラわく」を伝えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 町の人や身近な人に向けて、発表の計画を立てる。</li> <li>○ 発表会の準備をする。</li> <li>○ 身近な人を招待して、発表会を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 相手に分かりやすい伝え方を工夫して表すことができている。</li> </ul>	7
	<p>「ふぞくの町」へおれいをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ お礼の仕方を考え、準備する。</li> <li>○ お礼の気持ちを伝える。</li> <li>○ 学習を振り返る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ふぞくの町」の人や様々な場所や自分の住んでいる町に親しみや愛着を持っている。</li> </ul>	3

【単元の実際】

（第0時）「出会い」

思いや願いを育む生活づくり

主に学習材とつなぐ

☆ 一学期の町探検で出会った方からいただいた手紙を読み、もう一度町探検に行きたいという思いや願いを育てる。

9月頃、一学期に行った町探検先の道後温泉のボランティアガイドから、手紙が届いた。その手紙には、探検のお礼に子どもからの手紙を渡したことについて、「一人一人の言葉と絵に感激しまして涙が出ました」と書かれていた。町探検の計画を立て始める直前頃を見計らい、ボランティアガイドから手紙が届いたことを知らせた。その手紙は、町探検に行った子どもたち宛に一人一人書かれたものであり、温かい言葉が詰まった手紙であった。それを教師が一人一人に読み聞かせ、ボランティアガイドが用意してくれた道後温泉の写真とともに渡した。

このことをきっかけとして、教師は「みんなは、どんな人に町探検で出会ったかな」と問い掛け、「人」に焦点を当てながら町探検へと意識を向けた。すると、子どもは、「スーパーは、〇〇さん」や「鮮魚店の〇〇さん」と言い出した。そのような振り返を通して、子どもから「町探検に行きたい」「他のところにも行ってみたい」という声が上がリ、クラス全体に町探検に行きたいという思いが育まれてきた。そこで、教師が「みんなが行きたいなら、次の時間から町探検についての計画を立ててみますか」と伝えると、大きな歓声とともに、町探検の学習のスタートを切ることになった。

（第1・2時）「出会い」

思いや願いを持つ

主に学習材とつなぐ

☆ 町探検のテーマを考えることで、「人」に意識が向くようにする。

本時は、一学期を振り返ってどんな町探検にするかを考え、2回目の町探検のテーマを見いだす時間にした。教師の思いは、ボランティアガイドからの手紙が届いたことから、「町の人への関心

高めてほしい」というものがあった。

授業の導入では、一学期の町探検について振り返りカードに書き、それぞれ探検先に行ったことを思い起こすことができるようにした。その後、振り返ったことを基に、二回目の町探検をどのような探検にしたいかについて思考ツール「ピラミッドチャート」を活用して話し合った。たくさんの意見から、二回目の町探検のテーマは、『キラわく』じゃないものを探したい」という意見にまとまってきた。そこで、改めて「キラわく」について「町で見付けたキラキラ輝きわくわくするようなすごいところ」と捉え直し、「自分の家にはないもの」「仕事などを頑張っているところ」として共通理解を図った。ここで、『自分の家にはないもの』と『仕事などを頑張っているところ』では、どちらの方が『キラわく』をたくさん見付けられるかと、二つを比べるよう問い返した。すると、「大きな冷凍庫とかは見付けたけど、働いている人が頑張っているところはあまり見ていないな」という意見があり、子どもは、「もの・こと」に比べて、「人」についての発見が少ないことに気付いた。このタイミングで、「二回目はどのような探検にしたいか」を尋ねると、「頑張っているところを見付けたい」という意識が生まれ、町探検の方向性が決まってきた。そのような意識の高まりから、町探検のテーマを「町の人『キラわく』をさがそう」として共有した（写真1）。



写真1 ピラミッドチャートを活用したテーマ設定

### 【評価の実際1】

本単元の自己評価においては、ウェビングの手法を生かし「町探検物語」という一枚ポートフォリオの振り返りカードを活用した。振り返りを書く際は、日ごとに枠や線の色を変える。その中心には本時の満足感や達成感を表す自分の顔を描く。線をつないで自分の気持ちや気付きを書く。振り返りは毎回行い、目標時間としては5分間を設定し、三つ程度の記述を期待している。これらの振り返りに教師のコメントを加えて、意味付けたり、問い返したりして、無自覚な気付きを自覚できるようにし、気付きの質を高めていくことができるようにした。（以下、B児の自己評価）



#### 自己評価

B児の顔は喜んでいる様子で、手はピースサインである。記述については三つあり、一学期に行った探検先から次に行きたい場所を次々に考えている。

#### 指導者評価

満足感は高く、次も頑張りたいという気持ちを感じることができる。それは記述にも表れ、行きたい場所を次々につないでいることから、次時の学習に見通しを持っていることが分かる。これらのことから、B児の意欲の高まりを見取ることができる。

(第1時～)「出会い」

思いや願いを持つ

主に自分自身とつなぐ

☆ 幼児教育の手法「ドキュメンテーション」を取り入れ、前時の学習を振り返る。

本単元では、「出会い」の場面から幼児教育の手法「ドキュメンテーション」を取り入れ、子どもたちの発言や行動を記録し、学習がどのように展開されてきたのかをまとめ、自分たちがどのようなことを考えてきたのかを振り返ることができるようにした（写真2）。

実際には、教師が休み時間にドキュメンテーションを作っていると、子どもが興味を持って集まってきた。写真に写っている子どもに「この時、何を考えたかな」と尋ねると、「一学期の町探検の掲示を見て、次はどこに行こうかなと考えてたんよ」と教えてくれた。このように、ドキュメンテーションは子どもと共に作ることで、授業の中では分からなかった子どもの気持ちを引き出すことができ、無自覚の思いが表れる振り返りになっていた。



写真2 第4時のドキュメンテーション

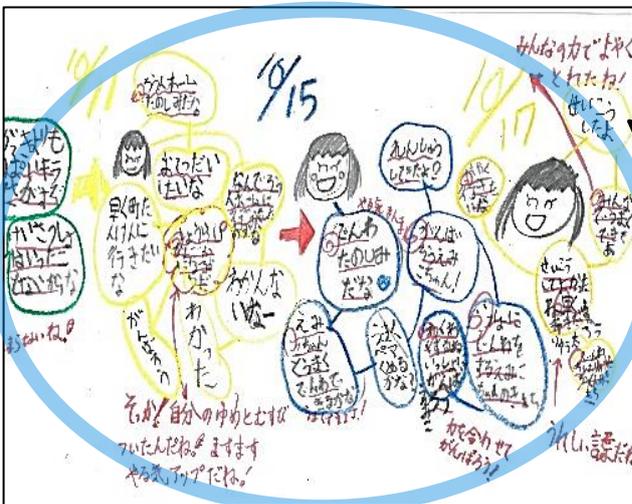
☆ 探検前から町の人とのつながりをつくるため、予約の活動を設定する。

「追究」の場面では、子どもたちが探検先に電話で予約するという活動を計画に取り入れることにした。教師の思いは、2学期の町探検では、町の人とのかかわりをつくり、子どもと町の人をつなぎたいというものがあった。

子どもと共に言い方や流れなど共通理解を図った上で、予約の練習に取り組んだ。グループによって、役割分担するグループもあれば、代表の子どもが対応するグループもあった。子どもは、納得と自信が持てるまで繰り返し練習する中で、相手に対する言葉遣いや敬意を払うことなどの基本的な生活技能を身に付け、相手意識を高めていくことになった。

予約をする時には、携帯電話をスピーカーにし、相手先の声が教室全体に響き渡るようにすることで、クラスが一体感を持って取り組むことができるようにした。予約中は緊張しながらも、丁寧な言い方やはっきりした声など身に付けたことを発揮して電話を続けた。子どもは、「とても優しくかった」と、町の人への気付きを持つことができ、意欲も高まった。

【評価の実際2】



自己評価

B児は、予約に成功したこと、「みんなうまくできた」ことに喜びを感じているようである。友達にも感想を求め、他者とのつながりを大切にしていることが伺える。

指導者評価

B児は学習に満足しており、今まで練習してきた成果が予約の成功につながり達成感を感じていることが分かる。また、他者と協力することで、課題を解決することができることを実感でき、友達のよさに気付き、「学びに向かう力」の高まりを見取することができる。

☆ 町探検の時間を十分に保障することで、町の人とのつながりを深める。

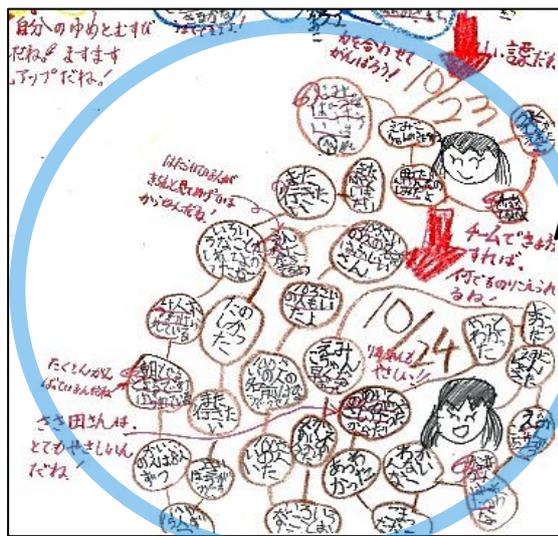
町探検に行く日の朝、子どもはワクワクしながら準備物を確認したり、探検先の方へのプレゼントの準備をしたりしてやる気に満ちた表情をしていた。二回目の町探検では、町の人とのつながりを大事にしたいという思いから、例年1時間の見学時間を30分長くし、1時間30分にした。また、探検先の方の思いや努力などに気付かせたいと考え、探検先に体験活動を設定していただけるよう依頼した。子どもには「おねだり」という形で、予約の際に子どもなりに練り合ったことを電話でお願いしていた。

これらのこともあり、町探検では、町の人とのかかわりが多く見られ、子どもはしっかりとつながりを持つことができた。老人ホームに探検に行った子どもは、車椅子体験をさせてもらい、「タイヤを回すとすいすい進むので、足の不自由な人にとって便利な道具だ」と実感を伴いながら考えることができた(写真3)。また、あるグループでは、1時間経過した頃に、その場の環境や町の人に慣れてきて、質問したり積極的にかかわったりする姿が見られた。子どもにとって、一学期とは違い、二学期は「自分たちで創り上げてきた町探検」という思いが強く、自信を持ってかかわる姿が見られ、多くの「キラわく」を持って帰ってきた。



写真3 車椅子体験をさせてもらう子ども

【評価の実際3】



自己評価

B児の顔には、満足している様子が表れている。B児は、今までで、一番多くの言葉を書いていて、様々なことに気付いている。「なんで楽しかったか」を自問し、その理由を「相手の人が優しくったから」ともしている。

指導者評価

B児は町探検に充実感を持っていたことが分かる。多くの気付きがあることから、「知識及び技能の基礎」の高まりが見られた。また、次への活動に意欲的であり、粘り強く取り組む態度が育っていると考える。

(第16・17時)「追究」

自分をひらく

主に他者とつなぐ

☆ 「気付きマップ」を作成し、他者の気付きをつなぎ、気付きの質を高める。

探検後に、これからどうしたいかを尋ねると、「探検して分かったことを伝えたい」「一学期みたいにグループで発表したい」という意見が多くあった。そこで、まず、自分が見付けたことを写真や画用紙にまとめ、一対一で伝え合う活動を取り入れた。子どもは自分なりに見付けた「キラわく」を教えたりクイズにしたりして、伝えたい思いを体全体で表していた。次に、全員を一つのところに集め、伝え合う活動の振り返りを行おうとした。すると、その場は「キラわく」の言い合いになり、同じ活動の繰り返しになってしまった。

そこで、言いたいことを伝え、共有する時間として新たに活動を設定し、「気付きマップ」にまとめることにした(写真4)。「気付きマップ」とは、ある対象について、知っていることや考えたことを自由に書き込み、線で関連付けたものである。対象には、町の人々の「キラわく」として、町の人々の写真を貼り付けた。教師は、子どもの発言をつなげたり、「どうしてそう思ったの」と問い返したりして、気付きを関連させたり新たな気付きを生み出したりできるよう働き掛けた。共有された「気付きマップ」は教室に掲示して、いつでも振り返られるようにした。



写真4 「キラわく」を対象にまとめた「気付きマップ」

【評価の実際4】



自己評価

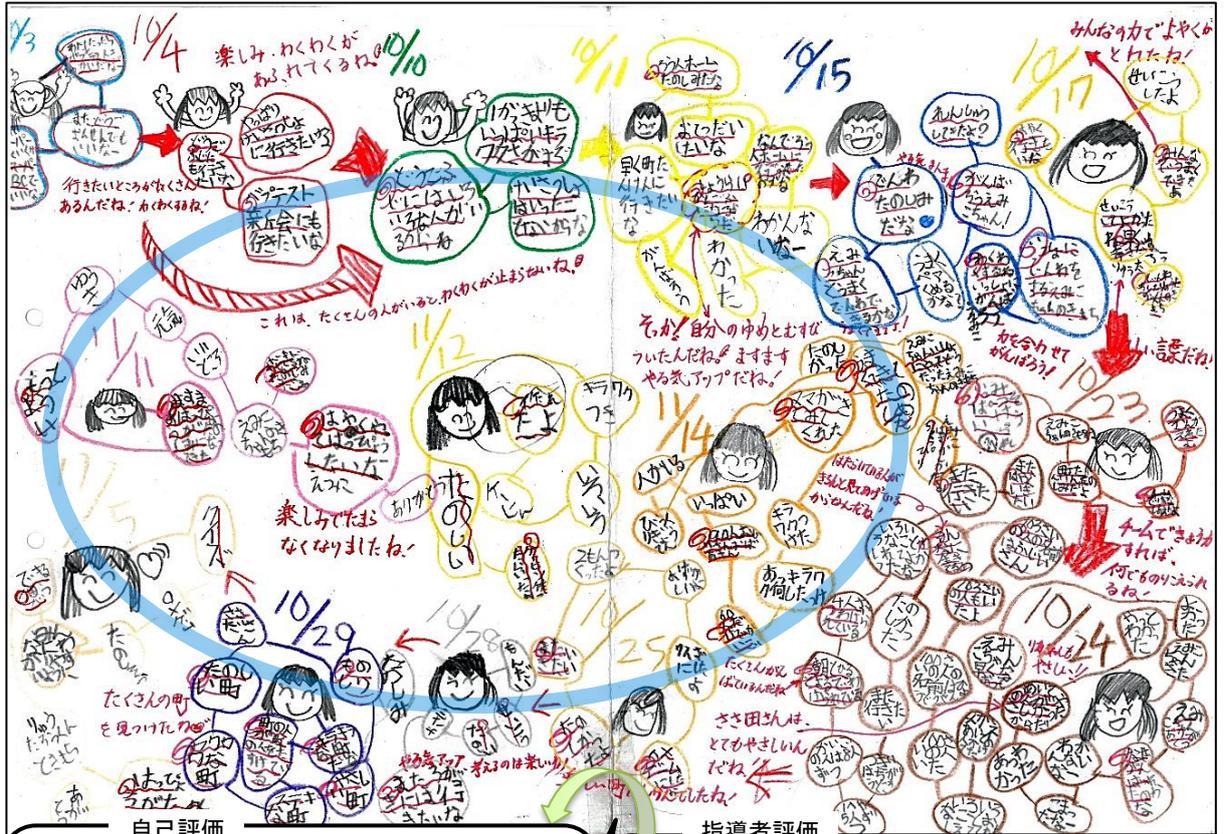
B児の顔には、満足している様子が表れている。B児は、自分でクイズ形式の伝え方を考え、「キラわく」を上手に伝えることができたことに充実感を得ているようである。次も探検に行きたいという気持ちが高まっている。

指導者評価

B児は学習に満足しており、自分で考えたクイズ形式の方法で、一対一の伝え合う活動でたくさんの友達に上手に伝えることができた。自分の思いを伝えることに手応えを感じているとともに、「思考力、判断力、表現力等の基礎」の高まりを見取ることができる。



【評価の実際6】



**自己評価**  
 B児の顔は、終始満足な様子が表れている。B児は、みんなに分かりやすいようにクイズをしようとしている。友達にも気持ちを聞き、自分自身も発表をますます楽しみにしている様子であった。

**指導者評価**  
 B児は本単元を通して満足感と充実感を得ながら学習に取り組むことができていた。見つけた「キラわく」が伝わる分かりやすい方法を選んでおり、「思考力、判断力、表現力等の基礎」の高まりを見取ることができる。

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- 町の人からの手紙との「出会い」や町探検のテーマを考える活動を設定するなど、単元構想を工夫したことで、子どもを学習材とつなぎ、町の人への意識を高めることができた。
- 「追究」場面において、予約の活動を取り入れたことは相手意識を高めるとともに、「町探検に行くには予約を成功させる必要がある」という思いから、子ども一人一人が自主的に練習をしたり、協力して予約したりする姿が見られた。
- 「気付きマップ」を作成することにより、子どもを他者とつなぎ、個々の気付きを関連させたり、そこから新たな気付きが生まれたりして、気付きの質の高まりを見取ることができた。
- ウェビングの手法を生かした「町探検物語」として振り返りカードの書き方を工夫することで、子どもが楽しく書き進めるようになり、自分の思いや気付きを容易に表すことができるようになった。また、自己評価として有効であっただけでなく、友達に自分自身のことを書いてもらうことで、子どもの相互評価につなげることもできた。
- 「ふぞくの町」について考える活動は、「追究」の場面の終末ではなく、「振り返り」の場面の終末に設定した方が、より学びが深まったのではないかと考える。
- ☆ 単元の終末には、「三回目の町探検に行きたい」という子どもの思いや願いがあふれていた。その思いや願いを受け止めることはできたが、子どもの生活や次なる活動に生かすことができなかった。そこで次年度は、単元構想段階でそのような思いや願いが出ることを想定して、子どもの気持ちを生かすことができるような展開を構想していく必要がある。

(大塚 翔)